北杜市から考える持続可能な観光地　～DMO によるマネジメントの持続可能性の観点から～

多摩大学経営情報学部中庭ゼミ３年（地域政策・観光まちづくり研究室）
梶本凌平、青木柊吾、荒金匠、今別府大志、峯脇由暉、村山昂大、吉田武司

1.目的

近年、持続可能性という言葉が様々な業界にて注目されている。観光業界でも、持続可能な観光への取り組みが行われている。しかし、持続可能な観光地と呼ばれる観光地はまだあるとは思えない。

そこで今回の研究では、山梨県北西部に位置する北杜市を調査し、持続可能な観光地になるためにはどのようなことが必要なのか調査していく。

北杜市を研究対象にした理由として、北杜市には清里高原という八ヶ岳南麓に位置している高原がある。1970 年代には清里ブームが起こり、駅前に東京都原宿のようなメルヘン調な建物が乱立し、多くの観光客が訪れた。しかしバブル崩壊後、ブームは沈静化し、駅前の建物は廃墟となった。清里高原は、持続可能な観光地にはならず、一時的なブームで終わってしまった失敗した過去を持っている観光地であり、北杜市が DMO の先進例であるためである。

２.調査方法

一般社団法人八ヶ岳ツーリズムマネジメントや北杜市観光協会などへ、協力企業との関係性や、コロナ禍での取り組み等を現地へのフィールドワーク、または zoom を使用したオンライン上で取材を行う。

3.北杜市の概要

山梨県北杜市は人口 46,461 人の八ヶ岳や甲斐駒ヶ岳などの山々に囲まれ、雄大な牧場や南アルプスからの湧き水など自然豊かな地域である。

現在はカントリーリゾート、避暑地として、観光客はアウトドアなどを目的に訪れている。

4.研究内容と仮説

研究するにあたり、我々は持続可能な観光地の定義づけをおこなった。

「一定数以上の観光客の維持」「自然資源の保護」「収益を自然資源に再投資」この 3 つのサイクルが循環することが、持続可能な観光地であると考えた。

北杜市が持続可能な観光地になるためには、八ヶ岳や南アルプスの湧き水といった、豊富な自然資源をマネジメントする必要があると考えた。自然資源をマネジメントするには、北杜市の酪農家や水利組合、商工会など地域の事業者が一体となり観光地全体が協力していかなければいけない。

1970 年代の清里ブームの失敗は、各事業者が個々で利益も求めた結果である。その失敗を繰り返さないためにも、地域の事業者が協力する必要がある。

今後、DMO である八ヶ岳ツーリズムマネジメントが、各事業者の連携を強くし、持続可能な観光地に導くツールにならなければならない。すなわち、マネジメントの持続可能性である。

しかし、通常は競合相手である各事業者が協力し合うのは困難になる。また、観光地づくりを DMO に一任させないようにしなければならない。より強固なつながりを持つためには、地域全体の利益を上げることだと考えた。

持続可能な観光地にするために DMO が実行すべきこと、そして海外 DMO のように収益を上げない日本版 DMO が成功するのか、他国や、せとうち DMO など他地域の DMO との比較なども交え研究していく。